

先端技術の実践・体験教育強化で志願者数が増加

千葉工業大学学長 小宮 一仁氏

最先端の知識と国際的視野を身につけた人材を養成

本誌 千葉工業大学は日本の私立工業大学では最も長い歴史を持ち、今年創立七〇周年を迎えましたね。

小宮 本学は一九四二年（昭和十七年）に興亜工業大学の名称で東京・町田の玉川学園内に設立され、その後一九四四年に東京・麹町の上智学院（現上智大学）内に移転、さらに一九四六年には千葉県君津市に移転し、千葉工業大学に改称しました。そして、一九五〇年に学制改革に伴い新制千葉工業大学になり、機械工学科、金属工学科、工業経理学科を設置するとともに現キャンパスの千葉・津田沼に移転し着実な発展を続け、現在では工学部、情報科学部、社会システム科学部の三学部一十二学科、大学院三研究科（修士課程七専攻、博士後期課程三専攻）に約一万名の学生を擁するわが国はもちろん、世界的に見ても最大規模の大学に成長しています。なお、興亜工業大学設立当時に使われていた「興亜」という名称は抽象的な概念を示す言葉ではなく、政府機関もしくは国策に沿って作られた団体、行事などに冠

された国策的な名称です。戦前の高等教育は圧倒的に官立優先でしたが、本学が文部省から「興亜」という校名の使用を許可されたのは、単なる私立大学ではなく「国策に沿って創られた、官立に準じる工業大学」と見られていたためです。

本誌 「師弟同行」と「自学自律」を建学の精神としています。

小宮 第二次世界大戦後に内閣総理大臣にも任命された東久邇宮稔彦王殿下は、一九二〇年代のフランス留学でヨーロッパの工業教育をつぶさに見た経験から、遅れをとっていた日本の技術力の向上を目指し、ヨーロッパのような工業教育機関設置の構想を持っていました。この構想を玉川学園長の小原國芳氏や東北帝國大学総長で金属工学者の本多光太郎博士、京都帝國大学教授で哲学者の西田幾多郎博士、政治評論家の徳富蘇峰氏などの協力のもと具現化したのが本学で、太平洋戦争という激動の時代に西田幾多郎博士などによって起草された本学の設立趣意書には、広く世界に知識を求める向学心



津田沼キャンパス

を持つ国家枢要の人材の養成が謳われ、学問への限りない期待と教育本来の理想が盛り込まれています。「師弟同行」と「自学自律」はこの設立趣意書の中から採ったもので、師弟同行はきめ細かい指導体制（教員と学生が一体となって学問に携わる）、自学自律は創造性豊かな人材の育成（自ら学び・思索し・創造し・解決する力を養う）を意味しており、本学ではこの建学の精神のもと、豊かな教養と人格を備えた人材を育成するための教養教育、変化する科学技術に柔軟に対応するための専門教育、創造性豊かな人材を育成するための実践・体験教育、工学・技術に夢を持ち続け、自分の将来像を描けるキャリア教育を行っています。

本誌 最近、理工系離れが叫ばれ、工業大学への志願者が減少していますね。



小宮一仁（こみや・かずひと）氏

1961年11月生まれ。東京都出身。1987年・早稲田大学理工学部土木工学科卒業。1989年・同大学院理工学研究科建設工学専攻博士前期課程修了。1991年・早稲田大学理工学部助手。1992年・同博士後期課程単位取得満期退学。1994年・千葉工業大学工学部助手。1996年・同専任講師。1998年・同助教授。同年・ケンブリッジ大学工学部専任助講師。2001年・千葉工業大学工学部教授。2012年6月・千葉工業大学学長に就任。工学博士。

建学の精神：「師弟同行」「自学自律」。学部：工学部、情報科学部、社会システム科学部。大学全体の学生数：9,853名(2012.5.1現在)

本誌 学長は英国のケンブリッ

ジ大学で教鞭をとっていたことがありますがね。

小宮 海外留学とは違い、大学の教員として赴任しましたので、英国の工学教育の方法やシステムを体感できました。この経験を生かし、単に高い技術を持った技術者、専門家を養成するだけでなく、豊かな教養と高度な専門知識をして国際的視野を身につけたグローバル社会で活躍できる人材の育成を行いたいと思います。工学者、技術者には専門知識は欠かせませんが、人間としての高い教養を兼ね備えていなければ良い製品を生み出すことはできないのです。国際社会における日本の地位の低下が懸念されていますが、日本の技術、工学はまだまだ優れており、グローバル化により見直されつつあります。今後さらに産業界と大学が連携して工学教育の底上げを図り、着実に教育と研究に取り組むことができ体制づくりを進めていきたいと考えています。また、学生の「やる気」を引き出すための学生支援のシステムを拡充することも大切で、学力だけでなく学生の社会適応能力や就業力などの強化にも努めたいと思います。

小宮 私 は学長就任前の四年間、入学試験の責任者でしたが、この間全学を挙げて大学の魅力向上に努めた結果、毎年数千人ずつ志願者が増加し、今春の入試では三万一千七百八名という創立以来最も多い志願者数を記録しました。この志願者数増加は高校生の興味が高い先端技術が学べる未来ロボティクス学科、未来ロボット技術研究センターなどをいち早く設置したことや、伝統ある学科が産官学一体となって多くの優れた研究成果を社会に提供していることなど全学をあげた取り組みが評価されたものと考えています。大学の研究水準の高さを示す政府の二〇二二

年度科学研究費補助金の採択額ではわが国の私立理工系大学二〇校中三番目になっています。また、未来ロボット技術研究センターで開発した緊急災害対応ロボット「クインス」は福島第一原発建屋に投入され、大活躍しました。さらに、本学は既に七万四〇〇〇名以上の卒業生を社会に送り出しており、全国のさまざまに分野で活躍している卒業生が本学の魅力を伝えてくれていることも志願者数増に繋がっています。

本誌 東京スカイツリータウンキャンパスをオープンしましたね。小宮 本学にはJ・R津田沼駅前で三・四年生と大学院生が学ぶ津田沼キャンパス（千葉県習志野市津田沼）と幕張新都心に隣接し一・二年生が学ぶ芝園キャンパス（同市芝園）があります。今年五月に研究活動を通じて生まれた先端技術を応用した体感型アトラクションとして、東京スカイツリータウンキャンパスを東京ソラマチの八階に開設しました。同キャンパスは、原発災害対応に本学が開発中のロボット「ローズマリー」のプロトタイプの実物展示・デモのほか、火星探査船操縦シミュレーターや超巨大ロボティクススクリーンなどを設置しており、誰でもコックピットに乗り込んで火星探査のシミュレーション体験などを

最先端技術に実際に触れ、体験することができ、ますます、本学の職員が常駐し、説明も行っていきます。本誌 学長は英国のケンブリッ